

二章 化学療法開始

4年目のイタリア暮らしが始まった。去年までのアレーゼ国際歓迎クラブの会長と行事係を退いたので、「公務」がなくなって暇になった。

暇になったもうひとつの理由はもちろん、療養というか闘病のためである。

イタリアに帰ってすぐの8月28日、イタリア人の友人が予約をとっておいてくれた(感謝!)国立がんセンターに行って、治療方針が決まった。はじめに化学療法を6カ月やって、うまく腫瘍が小さくなったら右乳房の部分切除手術、大きいままなら全摘出手術をしてから再建手術、そして1カ月の放射線療法、という変則的なやりかただ。長期戦である。先に全摘出、再建、それから化学療法、という一般的な手もあったのだが、わたしはものすごく、このさして大きくもない胸のふくらみを失うのに抵抗があったので、全摘は避けたかった。夫も、同じ辛い化学療法をやるなら、腫瘍が小さくなるのが目に見えてわかる手術前のほうが、耐える甲斐があると賛成してくれた。

イタリアは世界で一番の乳房温存手術国である。日本は手術で切り取るのが好きだが、ヨーロッパはできるだけ切るのを避けてほかの方法を探すようである。日本にはハラキリの伝統があるからか、切ってなくしてすっきりしようという感覚のせいか、それとも職人芸的なすぐれた外科技術があるためか、我慢が美德の国だからかはわからないが。

イタリアで温存が盛んな理由は、住んでいるとよくわかる。

まず見かけがひどく大切な国である。ミラノはファッションが有名な町だけあって、市場に買い物に行くのにも背広にネクタイが珍しくなく、散歩でさえ女性がスーツを着ている。ジーンズにもアイロンがぴしりとかかり、おまけに階級社会だから、アジア人がボロを着て歩いているとたちまち召使扱いされる。店や役所のひとの対応がはっきり違うのだ。それはもう日本では考えられないくらい露骨で、4人の子の育児に追われて身なりに気を使う習

慣が消え失せた「山だしの猿」であったわたしは、かなりの目にあった。レストランでは空（す）いているのに席がないと断られたことがあるし、ブティックの2階に上がったら灯りを消されて、「どうして？」と尋ねると「だってあんた買わないでしょ」と言われたときにはずいぶん頭に来た。

しかし、実はもっと、ひどく苦い経験がある。

最初の冬だった。

すてきな深紅のハーフコートをスーパーで見つけたが、腕の長い白人用のつくりではわたしには袖が長過ぎて手が隠れる。とりあえず買って、家の近所で補正してもらうことにした。

行きつけの小さなブティックで紹介してくれたお針子さんのアパートを訪ねると、エプロンをかけた年配の女性が、たったの900円でダブルの袖口を短くしてくれると言う。あら安い、嬉しいわ、と喜ぶわたしに、「どこに住んでいるの？」と彼女は尋ねた。

わたしが通りの名前を答えると、「誰と住んでいるの？」と彼女は重ねて聞く。妙な質問だと思ったが、年配のひとが突っこんで聞きたがるのは日本の田舎と同じかと考えた。

「亭主と子どもたちとだけど」

「で、旦那さんは何してるの？」

初対面の客相手に、たて続けの立ち入った質問である。それになんともなく雰囲気は気に食わない。いつものイタリア人の、ひとなつっこい明るい感じではない。なぜか彼女の夫とおぼしき老人まで隣室から出てきてじろじろわたしを見ている。

「科学者（シェンツィアート）よ」

日本だと「研究者」と言うところだろう。しかし、英語ではサイエンティストと言うのが普通だから、それをそのままイタリア語にしたのである。これがまちがいだったとは、そのときは知らない。イタリア語でも日本語と同様、夫の職業は研究者（リチェルカトーレ）と言うそうなの。「科学者」は日

本語でもノーベル賞級の研究者にしか使わないのと同じような感覚である。

「へ～え、シェンツィア～～～ト～！」

ご亭主は思い切りからだを反（そ）らし、そのことばを不自然に長々と伸ばして発音した。やっぱり何かひっかかる、不快な感じだった。

「ああら、そうなの。わたしゃまたどこかの奥様のところに住みこみで女中してるのかと思ったわ」

奥さんのことばに、わたしはにっこり笑って「違うわよ」と金を払ったが、アパートを出て寒風に髪を吹き上げられながら身を縮めて歩いていると、だんだんムカムカしてきた。

なんだあの態度は。

なんだあの物言いは？

なんだあの目つきは!?

突如、その理由に思い当たり、わたしは突きあげてくる怒りにかられて思わず立ち止まった。

彼らはわたしの言うことを信じていなかった。わたしを嘘つきだと思っていた。わたしの夫は科学者などではなくもっと「低級な」仕事をしていて、わたしはやっぱり住みこみの女中で、コートの袖が長過ぎるのは奥様のお下がりののに、見栄をはって「科学者だ」、「新品を買った」と嘘を言っていると彼らは思い、わたしを見下していた！

信じがたかったが、そう考えるとすべてが腑（ふ）に落ちた。

わたしは嘘が嫌いだ。もちろん、小さな嘘をつくことはある。セールスの電話に今から出かけるところだとか、約束したことができなかったのは、怠けていたのではなくて忙しかったのだとか。しかし、こんな大切な、職業や生活そのものにかかわることで嘘をついたことはないし、ましてやひとから嘘つきだと軽蔑されたことはない！

侮辱だった。

そして侮辱がこんなにこたえるものだとは知らなかった。わたしはこのとき初めて、なぜ世間や歴史の中で侮辱が原因で殺人や戦争が起こっているの

かということ、身をもって理解したのである。

そしてその屈辱感と怒りは意外に根強く、わたしは 3 カ月たっても忘れることができなかつた。ちょうど日本の母から電話がかかり、わたしがその一部始終をぶちまけると、母は共感や同情を示してくれるどころか、いつものようにお高く「そりゃあんたがみっともない格好をしたからでしょ」と、顔をしかめているのが見えるような冷たい語調で言い放つたので、わたしはブチ切れ、生まれて初めて会話の最中に電話を切つた。

しかし、お針子さんのところに行ったときに、わたしがみっともない格好をしていたのは事実だつた。色こそ茶で統一していたが、普段着というより寝巻きに近いような毛玉だらけのセーターにしわしわのコールテンのジーンズ、色の褪（あ）せたコートにぼさぼさの鳥の巣頭で、ピアスも指輪もしていなかつた。

そのうえ、わたしはアジア人。

怒って国際クラブで話していると、この手の「まちがい」や侮辱はアジア人にあまり珍しくないことがわかつてきた。

インド人の友人は、ブティックを出る際に「また来るわね」と言うと「買わないなら来なくていいよ」と言われている。彼女は怒って「わたしの趣味に合えば買うわよ」と言い返した。別のインド人の友人は、自宅の門の前で立ち止まり鍵を開けようと手を前に出したら、傍で立ち話をしていた男が小銭をくれようとした。乞食とまちがわれたのだ。そしてインドネシア人の友人は、家のベルが鳴って出ると必ず「奥様は？ と聞かれるのよ」とフンと鼻を鳴らした。女中だと思われているのである。「頭にくるからいつも、奥様はいない！ って言ってやるのよ」

ミラノでは貧富の差が激しく、多くの金持ちの家では使用人を置いているが、その使用人にはフィリピン女性が多い、という事実のせいもある。

わたしがおしゃれに本気で身を入れ始めたのはこのときからである。自分がきれいになりたいからではない。二度と侮辱されないように自分を守るため、というのがフツーと違うところだろう。

まず、きちんとした服を選んで念入りに色合いを合わせる。外出用にジーパンは履（は）かない。ここでは労働者っぽいから。で、必ずアクセサリもつける。そのアクセサリもプラスチック製のものはつけない。化粧はイタリア人でもしていないひとが珍しくないから、あっさりめの口紅とアイシャドー程度でいい。そして仕上げに、「ワタクシ、奥様でございます」という気合いで心もち顎をあげ、欧米人のように背筋を伸ばして歩く。

これでもう、いやな目にあうことはなくなった。

高い授業料を払ったものである。

そしてミラノではおしゃれだけではなく、女らしさ、男らしさが大切である。年配の女のひともジムに通ってウエストを引き締め、からだの線が出るぴっちりした服をよく着ている。

おしゃれで、きれい。

ほんとに。

ずいぶん勉強になった。当然、カジュアルな格好よりはエレガントなほうがいいと判断されている。日本では当時、中年以上の女性は中性的な存在に近づく感じがあったが、ここではいつまでたっても女は女である。夫婦のあいだでも、わりに男と女としての関係が続くらしい。

だからたとえ 50 になろうと 60 になろうと女が乳房を失うということはショックな、避けるべきことで、その肉体的精神的な傷を補うために、再建手術は国民健康保険でまかなわれる。

ついでにいうと、イタリアは毎月の税金・保険・年金の負担料がムチャクチャ高い国で、ウチの亭主殿の給料の半分はもっていかれる。結果、脱税がこれまたあたりまえのように盛んというのは日本と違うところかもしれないが（イヤ、同じか？）、その高い国民保険を使うがんや胆石のような手術をとまなう病気の治療は、このころはタダであった（そのあとはさすがに変わったらしい）。ふだんからかかりつけ医の診察は無料でも、専門医の診察や検査には一定の費用が要る。しかし、がんの治療を受けるという書類をか

かりつけ医に提出してからあとは、わたしは病院で一銭も払っていない。税金が高いと文句を言うのはピタリとやめた。日本だと保険がきいても数十万円かかっていたのではないか。特に、この夏帰国した際、一時は日本で乳がんの全摘手術、イタリアで化学療法、という方向で話が決まりかけていたのだが、その場合、イタリアで国民保険に入っているわたしは日本では無保険で、最低 100 万円の入院手術費を自費で覚悟していた。帰国しだい、役所で手続きをすれば国民保険に入れることをそのときわたしは知らなかったのだった。

さて、実はイタリアで化学療法に入る前に一騒動あった。血液、肝臓、骨、心臓、肺、と一通り検査をしてからでないとい治療には入れないわけだが、がんセンターでは、心臓検査の日がとれないので、どこかほかの病院でやってくれとわたしに言ったのである。

オイオイオイ、日本だと休み時間削ってでも押しこんでくれるぜえ。でもここは休むことが大切で、あたりまえの国だからなあ。労働者には楽だよな。

内心ぼやきながら、わたしは隣町ガルバニャーテの公立総合病院に行った。1年前にわたしが肩を脱臼したり、掌の骨を折ったりしたときにお世話になったところである。

ここで対応した若くて清楚な受付嬢がハズレだった。わたしに真っ赤な大嘘を言ったのである。

なんで事務の女ってのは若くて美人で無能なのか、ブスで有能なのか、どっちかしかないんだ！ とイタリアで働いている日本人の友人が怒って言ったときには、男というのはまったく、とわたしは睨（にら）みつけた覚えがあるが、イヤイヤ、この分類は案外当たっているかもしれない。

長い髪を後ろですっきりと束ねた彼女はまず、10 日以内には空きがないとわたしに告げたあとで、考えこみ、つけ加えた。

「でもね、がんセンターのお医者さんがこの検査の依頼状に『緊急』って書き込むか、緑のシールを貼ってくれるかしたら、できるわよ。『緊急』な

ら救急にかかれるし、緑のシールがあればどこの病院でも 72 時間以内にやるから」

翌日がんセンターに駆け戻って『緊急』と書いてくれ、と頼むと、女医さんは眉をしかめた。

「変ね。そんなの聞いたことない。そりゃ書いてあげるけど」

そう、女医さんは正しかった。救急に行くと、

「なんでここに来たんだ？」

「だってこれ、緊急なもの」

「あのな、ここは生命（いのち）にかかわる緊急だぜ。おまえさんの治療ができるとかできないとかいう話だろ。あてはまらないよ」

「でも受付がそう言ったのよ。だからわざわざ書いてもらったの。わたしには必要なんだから。がんを治すのよ！」口をとがらせてわたしはまくしたてた。

「そりゃここの仕事じゃない」

わたしはひるまずなおもゴネまくり、なんとか心臓専門医の診察と、心電図だかなんだか検査のひとつはやってもらうことになった。こんな面（つら）の皮の厚いことは日本ではやりたくないが、イタリアはやってあたりまえ。というか、やらないと生きていけない。店で苦情を言っても、「できない」とすげなく言われるのはごく普通で、そこでちゃんと修理なり注文なりしてもらうには、言って言って言いまくらないとダメなのだ。慎しみ深さの通じるお国柄ではない。わたしは性格が変わった、と思った。

……もつとも、以前からの知人に言わせると、「あんた昔からそうじゃなかったっけ？」ということになるが。

ともあれ、もうひとつ検査が残っている。同じ町の別の大きい病院へ行く。ダメ。もうひとつ、心臓ではすぐれていると評判の、自宅から反対側の隣町ローの総合病院。しかし、係が昼休みでいない。廊下で待つこと小一時間。やっと戻ってきた看護師に言うと、

「あなたそりゃ無理よ」

「でもガルバニャーテの病院の受付がそう言ったのよ」

「緑のシールがなくちゃあねえ」

「え、じゃあ緑のシールさえあればやってくれるのね？」

「72時間以内にやるわよ」

「確かね。今日は木曜日。金、土、日曜日でもやってくれるの？」

ここを先途と眼を吊り上げてわたしが詰め寄ると、

「土日は休みよ。明日の午前中にいらっしゃい。押しこんであげる」

ところで、イタリアで国民健康保険の一般町医者診察時間は一定していないが、このあたりでは夕方のみである。なぜか。午前中は大病院に勤務し、昼休みはたっぷり取るから。1日8時間以上の労働は法律で禁止されている（ホント!?!）。夕方の5時になるのを待って、わたしは前もって保健所に指定されていた「かかりつけ医」のところへ文字通り、駆けこんだ。つまり、べっぴんの受付嬢の二番目のまちがいは、必殺の緑のシールを出せるのが「かかりつけ医」だけであって、がんセンターの医者にその権利はないことだったのである。

翌日、2時間待って、心臓の検査はみな終わった。

やれやれ、これで治療に入れると胸をなでおろしながら、つくづく、ここは難儀な国やと思う。イタリア人にこぼすと、そうね、あんたみたいな強い性格じゃないと、やってけないわよ、とうなずかれた。

さあ明日から化学療法、という夜、とんでもないニュースを聞いた。アメリカで飛行機が5機乗っ取られ、それぞれビルに突っこんで何千人が死んだ、という信じられない話である。あの、2001年9月11日の同時多発テロだった。おかげでわたしががんの治療開始日が正確に記憶されることになった。日付変更線をはさみ、9月13日である。

実を言うと、イタリアに帰ってからの日々は日本で告知されてからのひと月と比べると、気分的にはるかに楽だった。誰でもそうだろうが、告知は、衝撃である。そして、その前の診察に至るまでの疑惑と心配に満ちたモヤモヤも、いいものではない。ましてや告知後の、どこで治療するかが決められ

ず、自分の意思に背（そむ）かざるを得ない状況も苦痛だった。しかし、いざ治療が始まればそこに迷いはない。

行動あるのみ。

イタリアでの典型的な化学療法というのは2期に分かれる。

はじめは3週間ごとに点滴を4回繰り返す。わたしの場合9月13日、10月3日と24日、そして11月14日である。

あとになって、日本ではそんな強烈なことはまずしないと日本の医者に驚かれたが、アドリアミチーナ（日本名アドリアマイシン）とタキソーロ（日本名タキソール）というきつい薬を2つ、同時に使っていた。薬液が赤い色なので通称ロッソ（イタリア語で赤）。次は薬剤を変えて3週間に2回、黄色い液の点滴を4カ月続ける。通称ジャッロ（イタリア語で黄色）。この2つのうち最初の点滴は、正直なところ過酷な治療と言わざるを得ない。

副作用がすさまじい。

聞いてはいたが、わたしも、脱毛、嘔吐、吐き気、口の乾き、胃と食道の焼けただれる感じ、下腹部と膝の痛み、便秘、口内炎に膣炎、手足の指先の無感覚、そしてはなはだしい倦怠感と、ひどい足の裏の痒みに見舞われた。

全部の症状が長く続くわけではない。日によってかなり違い、点滴の翌日に車を運転して隣町まで出かけたこともある。

個人差も大きく、うらやましいというか頭にくることというか、ケロツとしているひともいれば、眼が腫（は）れて痛んだ、というひともいる。日本でケロツとしていた、などという運のいい話は聞いたことがなかったが、ここではポロポロいて、喫茶店の仕事を平気で続けていたわよ、頭はハゲたけど、というひとに会って話している。わたし自身は、毎回1週間吐いて寝こんだというわけではないにしろ、2回目の点滴のあと、1週間胃と食道が焼ける思いをしたときには、「もう煮るなと焼くなとしてくれい」「がんなんぞ治らなくてもいいから、この苦しいのをなんとか、して、欲しい……」という気になった。

10歳の次男は、ソファでひっくり返っているわたしに、どうして薬で具合が悪くなるのかと不思議そうに尋ねた。もっともな疑問である。薬なら具合が良くならなければいけないではないか！ 母親が昔同じ治療を受けたというフランス人の友人は、あれは毒薬よ、と断言していた。同感である。それに、40代の体力でさえこれだけこたえるのだから、60代70代ではたまるまい。

もうひとつ耐えがたかったのが、痒（かゆ）みである。これは不思議な症状で、薬剤が神経にきたのだ。副作用としては、さほど珍しいものではないし、重くもない。はじめは、よくあるように手の指先と足の指が、正座したあのように触（さわ）るとジンジン痺（しび）れていて、手の指の先っぽは温度さえ感じなくなっていた。このジンジンは英語ではピンズ・アンド・ニードルズ（針千本、と言ったところか）、イタリア語ではフォルミコリイ（蟻〔あり〕が這〔は〕い回る感じ）と言う。このジンジンだけで終わってくればよかったのだが、そのうち、ジンジンが続くと痒みになった。少し歩き回ると、足の裏全体が猛烈に痒くなってくるのである。皮膚ではなく内側が痒いから少しくらいかきむしっても一時しのぎにしかないうえに、搔（か）けば搔くほど刺激を与えるので、痒みは止まらなくなる。

まったく、これほどの痒みは生まれてこのかた経験したことがない。今までにじんましんも毛虫かぶれもくらげかぶれもやったが、とても比べものにはならない。痒みがおさまるまでの30分ほどは、「かいーっ！」と絶叫せずにはいられない。ほとんど拷問である。そしてこの発作のような痒みが終わると、わたしはぐったりと消耗していた。

医者はいの副作用は把握しており、一応は対症療法として薬の一覧表をくれた。しかし副作用はひとによって違い、しかも医薬分業であるから、薬は自分で買いに行かねばならない。最初の点滴のあとで胃液を吐きはじめたので長男を薬局に走らせたら、「この嘔吐止めは高いから医者の方箋で無料にするほうがいいのではないかと薬剤師から電話がかかってきた。処方箋なしだと1日分で1万円すると言う。

かかりつけ医に子どもを行かせるのは14歳とはいえ、ちと荷が重い。本人が行ったことのない場所だし、イタリア語でしゃべらせなければならない。前からノルウェー人のカーリーが「マドカ病気になるって大変ね、できることがあったら何でもしてあげる。言いなさい」と言ってくれていたから、遠慮なく電話をかけて頼んだ。こんなときは国際クラブの人脈がどんなに重宝したかわからない。

嘔吐止めといえば、イギリス人のアンが、以前に母親が抗がん剤治療をしていたと言う。

「あれは辛いわよね。覚えてるわ。母は点滴から帰るたびに吐きづめに吐いてた。吐いたものが緑色をしてたのは胆汁の色だったのね。でね、マドカ、息子のサッカーの送り迎え、どうせウチの子も行ってるんだからあんたの息子もウチの車に乗ればいい。わたし車出してるのよ、どうしてわたしに言わないのよ」と詰め寄る。

「ありがとう。でもわたし嘔吐止めを点滴に混ぜてもらってから、1回も吐いてないの」と言うと、アンは眼を丸くした。

「嘔吐止めですって！ そんなものがあるの？ 聞いたことないわ！」

「あなたのお母さん、治療受けたのいつごろよ？」

「今高校生の息子が生後3カ月だったわ」

「じゃあ十数年前ね。それじゃあなかったでしょうよ。治療薬だって変わってると思うわ。考えてごらんなさい、製薬会社は毎年新しい薬を出してるのよ。もう10年たったら副作用なんて全然ない薬が出てるんじゃないかしら」

そうね、と言いながら、彼女の顔は曇っていた。十数年前にイギリスですでに抗がん剤治療をしていたとは驚いたが、可哀そうに、とわたしもしみじみ思った。十数年前に「そんなもの」があれば、彼女のお母さんはゲーゲー吐かなくてもすんだのだ。

あとで夫から聞いた話だが、この嘔吐止めというものは、化学療法をするようになってから開発されたらしい。嘔吐は通常、悪いものを身体(からだ)

から出すという行為であるから、止めてはいけない。「嘔吐止め」なんぞという薬は元々なかったのだ。化学療法が一般的になってから開発された新しい薬だから、その分値段も高いのだろう、と夫は言う。

しかし、それを言えば、100年前の日本で死病であった肺結核は、二次大戦後の一時期は手術で切除していたが今では薬だけで完治可能だし、今恐れられているがんだって、100年たてば数ある病気の中のひとつに過ぎなくなっているかもしれない。ひとは誰しもその時代の子である。時の流れと運命、ということを変えて思った。

九月

雲ひとつない九月の空の下

わたしたちすべてのいきものの命に限りがある

薄茶の兎は五年生きるか

鴨（かも）は十年

あの首を伸ばす小さな亀は

三十年も生きるだろうか

けれどわたしの命の可能性は

これら他のすべてのものより

ほんの少し限られている

夏が終われば

草はまだ青いけれど

太陽は輝いているけれど

雲雀（ひばり）はもう唄わない

そしてわたしが生き延びる可能性は
可能性は
あのすべての他のいきものより
ほんの少し限られている
ほんの 少し

嘔吐止めは効いたが、吐き気は薬でも治らない。胃と食道の焼けるのにも指定の薬は効かなかった。家にある、ふだんは胸やけによく効く制酸剤も。膝の痛み止めをのむといっそう胃が焼けた。便秘止めをのんだら下痢した。痒み止めはなんと抗うつ剤で、さすがにためらったが、試しに一度だけのんでみたら12時間眠った挙句(あげく)あくる1日眠かった。そして医者は、痺(しび)れは中枢神経、つまり手足ではなく脳ミソで感じているもので、わたしのように長期に続く場合は、注意して薬をのまねばならない、と言った。つまり、うかつにはのむな、ということだ。

3回目の点滴前の診察で、わたしはもう胃、食道と足の副作用には耐えられない、と正直にぶちまけた。副作用は黙って我慢すべきものではなく、医者に正確に報告するべきものである。それから吐き気止めも家に帰ってからのむのでは効かない、説明書をみれば化学療法の前にのめと書いてある、と言うと、「わかった、抗がん剤の量を20%減らそう、吐き気止めも点滴に混ぜよう」ということになった。

抗がん剤の用量を減らした効果は抜群だった。胃も食道も焼けなくなったのである。楽になった。しかしわたしに言わせれば、2割減がはじめからわたしには適量である。なぜなら、市販の小児用の薬の場合、欧米では年齢だけでなく体重ももとにして量を加減する。製薬会社の研究員をしている夫に聞いても、経口であれ注射であれ薬は血液にのって体内を循環し、患部にたどりついて効果を発揮するわけであるから、薬が効くか効かないかは血中濃度による。血液量は体重に比例するから、体重が少なければ同じ量の薬でも

血中濃度が濃くなって効きめが強いだろう、と言う。

日本人は白人に比べて小柄である。どのくらい小柄か。ここでわたしはエレベーターの壁の数字を参考にする。エレベーターにはたいてい「何人、何キロまで」という重量制限が書いてある。これが、日本だと8人480キロまで、といった数で、1人あたり60キロ換算が多い。ヨーロッパのアパートだと2人160キロ、てなもんで、1人あたり80キロになる。かなりおおまかなやりかただが、おおよそのところ、まちがってはいまい。

つまり、80キロのヨーロッパ人に普通効く量の75%で、60キロの日本人に適當、ということになる。もっとも、このすさまじい抗がん剤は量が多かったせいか、わたしの腫瘍を小さくするには非常によく効いて、3回目の点滴の前には医者でさえ、指で探ってどこだったっけ、というほどになっていた。最大1.5センチね、と言う。治療前は触診で3センチ超、写真で2センチ×2.2センチだったのだ。わたしにはさすがにどこかわかったが、3回目の点滴をして1週間もすると、自分でもどこかわからなくなっていた。

万歳！

レントゲン写真は点滴に行くたびに撮（と）らない。日本だとおそらく毎回撮っては眺めているのではないかと思うが、ここではどうせ規定回数ほこなすのだから、という考え方なのか、触診で充分だと思うのか、それとも必要以上の放射能被曝を避けるためか、無関心である。

写真といえば、イタリアらしいゲゲッと言う経験をした。

日本の日赤病院で撮ったレントゲン写真と超音波写真のコピーをイタリアまで持参したら、がんセンターではちゃんとそれを放射線科の専門家に回してサイズなどを鑑定させ、撮りなおすような無駄なことはしなかった。それはいいのだが、まだ治療にかかる前のある日、診察室のわたしのいる前で看護師が医者に向かって、なんとかさんの写真がなくなった、と告げるではないか。

管理不行き届き、無責任な話である。え、と女医がさすがに眼を剥（む）

き、「あのひと確かもう手術終わったよね」と確かめたあとで、「わたしにどうせえって言うのよ」と看護師を睨（にら）んでぼそりつつぶやく。看護師も看護師で、「わたしも知らん」と同様にぼそりと言って首を振る。中年小太りの女性ふたりは睨みあったまま、「わたしにどうせえって言うのよ」、「わたしも知らん」、と二度繰り返し、そして沈黙した。

こんなとんでもない話を聞かされて、わたしが「頼むから患者の前でそんな話をしないでくれ！」と内心叫んでいると、その日のうちに、似たような事態が自分にふりかかってきた。医者に、もう一度写真をよく見たいから、写真部にとりに行ってくれ、と言われて写真部に行ったら、棚をあらいだらい見て「ない」と言われた。

わたしは欧米風に眼をぐるりと回して思いきりイヤな顔を試みせた。

「どうしても要るのか？」

「スイ」（はい、の意味）

「今日診察か？」

「スイ」

「わかった。探すから待っててくれ」

彼は棚と引き出しを全部、隣の部屋まで二度見たあと、電話をかけ始めた。待つこと1時間半後、やあ、あったよ、と彼がにこやかに笑う。

「文書庫に行ってくれ」

なくなっちはいなかったのだ。

腹を減らしてわたしが腫瘍科に戻ると、ふだん仏頂面（ぶっちょうづら）の女医さんが妙に愛想がいい。

「悪いけど、明日またそれ持ってきてくれる？」

「あら。また明日。じゃあここに写真置いといていい？」

「ダメ。置いとくとどうなるか今日よくわかったでしょ」

おっしゃるとおり。

ハンドバッグを片手に持ち、版の大きいレントゲン写真を別の手に抱えて路面電車に乗ると吊り革をつかむ手がなく、揺れた拍子にわたしは派手にこ

ろげた。

事態はここで止まらない。こういう話をイタリア人にすると、もう一度絶句するはめになる。

「ねえ、ちょっと聞いてくれる？ 今日こんなひどいことがあったのよ！」

当然わたしは、「んまっ、あきれるわねっ」という受け答えを期待しているわけだが、外国人ならともかく、イタリア人はまずそんなことは言わない。少し眉をひそめて、「そう」と言うのがせいぜいである。「自分で用心しないとダメね」

つまり、ここではいいかげんなのがあたりまえなのだ！

これを読んでいるあなたは言うかもしれない。

「マドカ、悪いことは言わないから、そんないいかげんなところはやめて、もう日本に帰ったら？ 日本で治療したほうがいいんじゃない？」

そう、イタリアはつくづく、しみじみ、信じられないくらいいいかげんな国である。たいていの外国人は、怒る。激怒する。何度も。そして、いくら怒ってもこの国に変わりようはないのを悟って、ぶつぶつ文句を言いながらも、慣れていく。

その代わりにいいことが山ほどあるからだ。

美術、音楽の美しさ。食べるものの美味しさ。ラテン特有のひとなつっこさ、温かさ。明るさ。

わたしも魅せられたひとりである。